

## 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方 に関する特別部会（第2回（令和4年10月3日））における主な意見

- 義務教育と高校教育はつながっているため、それぞれのワーキンググループにおける議論はお互いに見えるようにしておくべき。
- 不登校が増え、通信制の学校が増えてきていることは、新しい高校教育の在り方と捉えられるが、一方で実態がよく分からないところがある。高校は、子供が企業に入る前に人間関係や社会性を育む最後の機会になるかもしれない場所。通信制はもはや勤労青年のための学校ではないということを前提に、高校はどういう場所であるべきか、もう一度考えていくべき。
- 公立の通信制高校を変えていくべき。自立した学習者を前提にしているところは、様々な課題を抱える子供にとっては厳しい場所。公立の通信制の在り方次第で、広域通信制のサポート校に多額の学費を支払わざるを得ない家庭を救っていけるところがあるのではないか。
- 夜間定時制の中には、外国にルーツのある子供が多数を占める学校もある。多様な言語を話す子供への対応は難しく、GIGA端末を用いた言語のサポートも考えていかないといけないのではないか。
- 通信制と定時制を抜本的に見直していくことが大事。また、全日制や普通科において対応できてない部分について、その原因を明らかにし、サポートしていくことが大事。
- 全日制・定時制・通信制の在り方を含め、高校教育の共通性と多様性という言葉をどのように考えていくのか、議論していくべき。
- 共通性をコンテンツで担保するのは義務教育で十分であり、高校は、生涯にわたって必要とされる学びを自力で遂げていくことができるようにするといった、資質・能力で考えていくべきではないか。